

目的 自然が生産する花卉の色素のうちフラボノイド系色素の繊維への染色性について、すでにいくつかの実験を試みた。本報は南花直後の花卉を用いた染色による場合と、花卉を乾燥して用いた場合との染着効果、染色堅ろう度を比較検討した。

方法 供試試布：絹羽二重、綿ブロード。供試花卉：チューリップ（Queen of the Night）花卉、（色素主成分…anthocyanidin の 5 の delphinidin）乾燥花卉は摘花花卉を3日風乾後、真空乾燥機で10時間乾燥粉砕して用いた。使用薬剤：クエン酸、ハイドロサルファイト。染色方法：(1) 生花卉の場合…蒸留水と花卉をミキサーで粉砕し液状としてクエン酸溶液で最適染浴PHに調整し染色液とする。(2) 乾燥花卉の場合…花卉の水分率を求め(1)の生花卉より水分量を差し引いた計算量で(1)の場合と同量の乾燥花卉粉末を用いクエン酸で最適染浴PHを調整し染色液とする。(1)(2)ともに染色温度 15~22°C (室温) 染色時間 5~20時間とし。媒染剤は硫酸銅、酢酸銅、酢酸鉛を用いた。試験項目：染着色相、染着濃度はSM-カラーコンビュータ型でXYZ、x<sub>1</sub>、H.V.C.、VxVyVz (アパース、ニッカーソンの色差式) ΔEを求め、洗たく汗、耐光染色堅ろう度試験を行った。

結果 染着効果：乾燥花卉を用いた場合は生花卉の場合に比べてΔE値で絹は8.45、綿は12.87の結果を得、極めて著しく良好であった。媒染を行った場合も同様で、前媒染を行えば特に濃色に染着しΔE値は乾燥花卉の場合より26高かった。染色堅ろう度：試布は1回染色1回媒染であるため堅ろう度は不良で、特に汗堅ろう度が劣った。染色媒染繰返して色相はくすみ堅ろう度は向上するが更にこの点を研究検討中である。